

目

□ 經驗的人生と生物學的倫理觀	千葉安良
□ 詩と宗教	三浦みれよ
□ 傳記と文學	山口さき
□ 東京と地震(承前)	比良靜江
□ 綾部君碑銘	細田劍堂
□ 首夏の歌	尾上柴舟
□ 和歌	堀尾さめ 三島浦子 つきぐさ L. T.
□ 寄宿舍の楠の木	ピロホー
□ 曉	堀尾トメ
□ 校庭の春	坂井貞
■ 第三十五回文科學術談話會記事 會計報告 會員動靜	

次

經驗的人生と生物學的倫理觀

千葉安良

談話要項

一、序論

イ、本談話を理解するための準備的考察。

1. 「あたりまへのいふこと」を「判りきつたこと」に。

2. 科學的考察は人性の自然より發生せるものなること。

ロ、談話題の意義の解説。

1. 生物學的倫理觀の意義及び之れに對する批評が今日の談話の主目的なること。

2. その批評の立脚地を經驗的人生に定めしこと及び經驗的人生の意義。

二、本論

イ、現今の精神科學上に於いて及び一般人士の常識的見解に於いて、生物學的見解が重きをなせること。

1. 科學の職能と假説の性質

2. 精神科學上に於ける假説——其中生命に關する哲學說中、生物に自己保存種族保存の二傾向あること。

3. 學說として此の假説の成立せる由來。

4. 此の假説と生物學の研究との密接なる關係、並びに精神科學の基礎學としての生物學の現今の科學上の位置の重きこと。

5. 常識的見解と生物學の主張との一致せること及び生物學的見解の一般人心を支配せることの深きこと。

ロ、倫理の生物學的見解に對する吾人の態度。

1. 吾人は此の見解を或程度までは採用するも、絶對的盲目的にこれに没頭すべからざること。

2. 生物學の主張の紹介。